

基本の怖さと大切さ

神戸大学経済経営研究所
助教授 下村研一

経済学，特にミクロ経済学の理論の体系化は，中学高校を通じて学んだ英文法の体系化とある部分よく似ている．両方の学界の偉大な面々は，飛び交っている膨大な情報の意思伝達方法の中から「共有知識」と認定したものを選びすぐって「基本」とし，小さな約束から系統立てて基本の整理を行なっているという点である．私が受けた英文法の授業は，現在，過去，未来，進行形，完了形，仮定法，そして仮定法過去と時制中心に整理されたさまざまな規則を基本として中学の三年間と高校の一年間で学んだ．次々と新しい約束が出てくるが，前に出てきた約束は生き続けるという矛盾のない基本の体系が教えられた．

ミクロ経済学も，その祖と言われるレオン・ワルラスが『純粹経済学要論』(1874)で，消費，交換，生産，資本，そして貨幣，と市場の「基本」を順次導入することで市場経済が動く原理を体系化した．人類が原始人の時代から市場をいかに作ってきたかを思わせる見事な整理の視点である．以後このワルラスが残した体系はジョン・ヒックスが『価値と資本』(1939)で，ジェラルド・ドブリューが『価値の理論』(1954)で継承した．両書にはともに市場経済原理の「基本」がワルラス的視点から精選して書かれており全然分厚くない．なお両氏はそれぞれ1972年と84年にノーベル経済学賞を受賞している．

しかし，これほどまで評価された「文法書」でも近年の経済に関する学術的研究成果の理解および市場現象の説明に関する意思伝達には不十分である．情報，インセンティブ，環境などの問題の多くが「経済」の問題として認識され始め，新たな分析方法と使用言語が劇的に増えた．ここからが英文法と違う点である．私が高校の英文法を学習し終えて四半世紀が過ぎたが，意思伝達に用いる英文法は，外国人との共同研究のためでも高校で教わったそれ(それ以下?)で十分間に合っている．ところが，ミクロ経済学の「文法書」は前述のような時代背景を受け，90年代後半で大きく変わった．既に述べた意思伝達の不十分さを克服するため，研究者達は次の世代に向けて「基本」を増やしたのである．

現在世界の経済学大学院で最もよく使われているとされるミクロ経済学の教科書は

百科事典より厚い。私は10年前この本を初めて手に取ったとき、まずその大きさと重さに驚いた。それから中身を見た。この本で勉強する若い学生をうらやましく思った。これと前後して、ゲーム理論、マクロ経済学、計量経済学でも教科書の大型化が起きていた。いずれもそれぞれの分野の「基本」の増強が目的であることは明らかであった。そしてその教育を受けた当時の若い学生が21世紀になって若手経済学者として学界にデビューしてきた。

結果はどうか。これは飽くまで国内の学界に限った私見であり、若手経済学者の数が大学院重点化により急増したという要素もあるのだが、(上位者は別として)平均的なレベルは下がったと思う。質量ともに充実した教育を受けてきたはずなのに、である。近年の経済学研究の進歩による相対的な現象でない証拠として、昔は平均的な大学院生(あるいは上位の学部生)が当然のように理解してきた定理の証明や古典的な有名論文の内容を、現役の若手経済学者が理解できなくなっているという現象が見受けられるようになった。新しい論文の内容も聞いていると「本当にそんなことが書いてあるのか」と思いたくなることが多く結局自分で読むことになり、論文を見た瞬間自分の予想は正しかったと認識するケースがほとんどである。

われわれが何を基本と考えるかはわれわれよりむしろ次の世代にとっての問題である。そして次の世代はその次の世代に基本を与える。これは将来の行く末を左右する問題であり、その影響を考えるとそら恐ろしいものがある。今学界で起こっている現象は、もしかすると食べ物不十分だった世代が子供達に必要以上に食べ物を与え消化不良を起こしている状態なのかもしれない。しかし今後、その「食べ物」に該当するもの、つまりさまざまな分野から矛盾なく新たに「基本」として持ち込まれるミクロ経済学の知識や分析方法は減りそうにない。そう考えると、次の世代に与える基本とは「自分にとっての基本の見極め方」となるであろう。でもそれはそもそも与えることができるものなのか。課題は残されていると言わねばならない。